

小出裕章著「原発のウソ」扶桑社新書、扶桑社 2011年6月1日刊を読む

## 原発のウソ

### 1. 地震地帯に原発を建てているのは日本だけ

- (1) そもそも、「地震大国」の日本は原子力発電所を建設していいような国なのでしょうか。大地震というのは世界のどこでも起こるわけではありません。太平洋を囲む一帯と、中国から地中海へ抜ける一帯に集中しています。それ以外では基本的に大地震はめったに起こっていません。
- (2) アメリカには 100 基を超える原発がありますが、その多くは東海岸で、大地震が起こる可能性のある地域はきれいに避けて建てられています。150 基の原発があるヨーロッパは非常に地盤の強い場所で、ほとんど地震が起こりません。
- (3) 日本はどうでしょう。大地震が頻発している場所なのに、すでに 54 基もの原発が建っています。地球上の地震地帯に原発をたくさん建てているのは「日本だけ」と言っていていいでしょう。
- (4) このような行為を後押ししてきたのは「専門家」たちです。たとえば 1995 年 1 月の阪神・淡路大震災が起こる直前、日本の耐震設計の大家は次のようなことを言っていました。「ノースリッジ地震の後も、サンフランシスコの被害が大問題となった 1989 年ロマブリエタ地震の後も、日本の建設技術者は、『ところで日本の構造物は大丈夫なんですか』という質問をあちこちで受けるはめとなった。『あれくらいでは日本の構造物は壊れません』というのが、私たちの答えである……設計で使う力は、世界の地震国で使われている力の数倍は大きい……なんと言っても最大の理由は、地震や地震災害に対する知識レベルの高さであろう」(片山恒雄東大教授、「予防時報」第 180 号、(社)日本損害保険協会、1995 年 1 月)
- (5) ところが阪神・淡路大震災で神戸の街が倒壊してしまいました。次々に倒壊したビルや崩落した高架の姿を生々しく憶えておられると思います。
- (6) その惨状を目の当たりにした日本の耐震工学の専門家の感想は「予想を超える揺れだった」というものでした。今回の原発事故と同じですね。専門家たちは、平気でいつもそういう言い逃れをします。
- (7) 「想定外」の地震が起きても、地熱発電所や風力発電所は無事でした。火力発電所ではだいぶ被害が出ましたが、それでも原発の被害とは比べものになりません。「想定外」の事故が起

できれば、人間の手ではどうにも收拾することができない。そんな恐ろしい施設を日本はたくさん造ってきてしまったのです。

## 2. 「発電所の全所停電は絶対に起こらない」ということになっていた

(1) 原子力発電所は「機械」です。機械は必ず壊れます。運転しているのは「人間」です。人間は必ずミスをします。だから「事故は必ず起きるもの」と、常に想定しなくてははいけません。

(2) 福島の事故は全ての電源が失われたことによって起こりましたが、専門家たちは発電所の「全所停電(ブラックアウト)」が一番危険であることを長年の研究の積み重ねでよく知っていました。ではなぜ防げなかったのかというと、「発電所の全所停電は絶対に起こらない」ということにして、それに「想定不適当事故」という烙印を押してしまったからです。

(3) 「そもそも発電所なんだから自分で発電しているし、ダメなら送電線から電気をもらえばいい。それがダメでも非常用のディーゼル発電機がある。最悪の場合はバッテリーもある。だから、全所停電など起きるはずがない」と決めつけたのです。

(4) しかし、それは現実に起きました。

(5) 電力会社は、事故を受けて「非常用発電機を丘の上に建てよう」「電源車を何台が配備しておこう」などの対策を立てました。でも、これらは「対症療法」にすぎません。人間だっているんな病気になるりますが、一つの病気を防いだからといって別の病気にならない保証はどこにもない。機械の事故の場合は、すでに起こったタイプの事故の対策はできるけれども、これから起こる「未知の事故」については対策ができません。次の事故は必ず「想定外」の原因で、全く違った形で起きるからです。

P140 ~ 142

### [コメント]

小出先生に何と言われようと、東電は言い訳ができない。原発事故は発生してしまい、収束の目処すら立っていないからだ。火山国に原発を建設しているのは日本だけという考えは、傾聴に値する。小出先生の批判に耐えられない限り、原発は日本では避けるべきかもしれない。犠牲が余りにも大きすぎるからだ。

- 2011年7月3日 林 明夫記 -